

## 論文要旨

氏名 石井 容子

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes 研究

一足跡と功績一

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。  
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。  
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク(1枚)を併せて提出すること。  
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

論文要旨  
熊本洋學校教師 Capt. L. L. Janes 研究  
—足跡と功績—

熊本大学大学院社会文化科学研究科  
文化学専攻 欧米文化学領域  
石井 容子

### ジェインズ研究

本論は、日本に招聘された L. L. ジェインズ大尉 (Leroy Lansing Janes、1838 - 1909) の教育者、宗教家、及び、近代化への指導者としての足跡を明らかにするものである。

ジェインズは、初度と再度の来日の間に 16 年ほど帰米した時期があったが、日本で 5 つの学校—熊本洋學校 (1871 - 76 年、後半 2 年は私学扱い)、大坂英語學校 (1876 - 77 年)、第三高等中學校 (1893 - 95 年)、鹿児島尋常中學校造士館 (1897 年)、第三高等學校 (1897 - 99 年) に赴任し、その全てが官公立の学校であった。

熊本洋學校幹事、野々口爲志は、「開校後の生徒の成績は非常に良好で、一年後には生徒はそれぞれ英語で日常会話を自由に話すことができるようになった。」(『肥後藩國事史料』、現代文に要約) という談を残している。この記録は、数年前まで鎖国政策が取られていた日本国の辺地で、漢学に精通し開国維新に伴って外国語を学び始めた 10 歳から 15 歳の生徒が、僅か一年程の短期間で、日本語から見て言語距離の長い言語を習得できたことを意味する。従って、生徒が短期で英語を習得できたのであれば、熊本洋學校は、開校当初に格付けされていた小学校<sup>1</sup> 以上の成果を出していたことになる。野々口の所見は、疑問、賛嘆、違和感のそれぞれをもたらし、ジェインズ研究を始める動機となった。

本論は、資料に基づいてジェインズの足跡を再検認する形を取り、章節はジェインズの職歴ごとに時系列で構成する。しかし、ジェインズ研究の場合も、同時期の他の日本英学史研究と同様、資料が潤沢ではない。彼の日本滞在中でさえ、資料が抜け落ち、ジェインズがどこで何をしていたのか掴めない時期があった。この時期の実情に関しては今後の課題としたい。

研究を進める中で、洋學校関連研究書籍で引用参照された先行研究書が特定できることが分かった。その先行研究とは、『ジェーンズ 熊本回想』(田中啓介、上田穰一、牛島盛光 共著、1978 年(初版)、1991 年(改訂版))と、『熊本バンド研究 日本プロテスタンテ層無の—源流と展開』(同志社大学人文科学研究所、1965 年(初版)、1997 年(新装版))、『海老名弾正先生』(渡瀬常吉、1938 年)等である。『ジェーンズ 熊本回想』は、ジェインズの著書 *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism*. (京都 同志社 社史々料編集所、1970 年) (以下『クマモト』とする。) を抄訳したものである。『クマモト』に関しては、『ジェーンズ 熊本回想』で抄訳されていない部分に、むしろ彼の主義思想が描

<sup>1</sup> 「小學校之教ヲ施」す。(『改訂 肥後藩國事史料』卷十、侯爵細川家編纂所、1932 年。)

かれているため、積極的に引用参照したい。『熊本バンド研究』内の熊本洋学校研究は、主に昭和32年から36年頃までに「県政資料」（熊本県立図書館所蔵）等に基づいて論考されているものと思われる。渡瀬常吉は、洋学校二級生、海老名弾正の教え子であり、洋学校の当事者ではない。渡瀬の書籍の内容に関しては、再検認したい。

これらの先行研究からだけでは、ジェインズの足跡の全容は掴めなかった。そのような状況の中で、坂上竹松（カノウエ タケマツ）関係資料<sup>2</sup>の発掘は、ジェインズ研究に光明を投げた。当該資料は、熊本県立第一高等学校（以下、第一高校とする。）の生徒だった坂上征（せい）さんが50年以上前に寄贈した祖父竹松の教科書やノート、修学証明書等、数十に及ぶ貴重資料で、現在、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課が保管する。竹松の資料は、適宜取り入れ論考に活用したい。

『熊本英学史』（田中啓介 編、1985年）から、洋学校で教科書として使用されていた洋書が熊本県立大学附属図書館に所蔵されているという情報を得、また、洋学校一級生、小崎弘道の自伝『七十年の回顧』（小崎弘道、1992年）から、ジェインズの遺稿の大部分がジェインズの未亡人から二級生、浮田和民に贈られたことを知った。<sup>3</sup> 肥後藩は優秀者を長崎等に遊学させて英学を学ばせており、そのような遊学生も洋学校に入学していたことを記す記録も見出した。

加えて、『クマモト』の他、「県政資料」（熊本県立図書館所蔵）、「アメリカン・ボード宣教師文書」（同志社大学所蔵）、「第三高等学校関係資料」（京都大学大学文書館所蔵）、「浮田文庫」（早稲田大学大学史資料センター所蔵）を調査した。これらは、先行研究でも取り上げられた一次資料ではあるが、まだ注目されていない部分、或いは、言及されていない部分がある。さらに、「戦前期外務省記録（明治・大正期）」（外務省外交史料館所蔵）等、新たな資料も発掘した。

換言すると、洋学校では洋書を使用して授業が行われており、洋学校生徒の全員が初めて英語を学んだ訳ではなかったことも判明する一方、これまで先行研究に引用参照された資料であっても、まだまだ手つかずの情報が多く存在する可能性も出てきたのである。

本論では、上記の一次資料等を主たる資料とし、これを再度見直して、新たな情報の確保を目指す。また、先行研究では、それぞれの資料が単独で扱われた傾向が見られたが、所蔵先の異なる資料を相互参照して、新たな事実関係を炙り出すことを目標とする。

さらに、ジェインズ関係資料の大きな特徴は、彼が幾つかの演説<sup>4</sup>原稿文を残していることである。当時、演舌<sup>5</sup>（演説）を課した学校は、東に福沢諭吉（1835-1901）の慶應義

<sup>2</sup> 熊本県立第一高等学校（以下、第一高校とする。）は、熊本洋学校跡地に建設された。征さんは第一高校の授業で、祖父の残した資料に気づいたと伝えられている。戦火を潜り抜け、洋学校の貴重資料がこれほど纏まって見つかったことは奇跡である。それ以上に、征さんが祖父と同じ敷地で勉学に励んでいたことは縁を感じさせる余話である。

<sup>3</sup> 小崎弘道『七十年の回顧』（伝記叢書102）大空社、1992年、p.203。

<sup>4</sup> 海老名弾正『熊本洋学校と熊本バンドと [講演速記]』熊本楷行社、1935年、8頁。

同志社が後に演説で特色を発揮したのは、熊本洋学校出身の熊本バンドが演説を熊本から持参したためである。

<sup>5</sup> 坂上竹松の洋学校修学証明書「第三周後半年明治九年七月三十一日修了書」に従って、「演舌」

塾、西に熊本洋學校だけである。両者の違いは、前者は日本語で、後者は英語で、演説の指導がなされていたことである。後に、基督教を信仰した熊本洋學校生は同志社英學校に進学したが、同志社第一回卒業生 15 名は全員元洋學校生で、<sup>6</sup> 卒業式には彼らがそれぞれ英語でスピーチを行っている。ジェインズは、国会が開かれる 17、8 年前に日本の将来を予見して、「将来、代議政治が行われるようになれば、国会議員は自分の政治思想を人に解るように、人を動かすように、発表しなければならない。演舌はそのための準備である。」と、演舌の重要性を生徒に教えた。しかし、ジェインズの演説文はこれまで殆んど取り扱われていない。『クマモト』等の他、演説原稿文にも彼の信念が眠っていると推察し、これを調査する。

公文書が戦争などで焼失している場合は、回顧録や証言を裏付けに当てたが、その場合も、資料の精度を高めるために、できる限り当事者本人が発した情報、かつ、より作動日に近い時期の情報をできれば複数収集し、これらを相互参照して、記述が事実として正しい範囲のものか否かを判別した。さらに、熊本洋學校で用いられたとされているテキストに関しても論考する。

熊本バンド研究の先進研究機関、同志社の研究班が熊本を訪れたのは昭和 32 年であった。膨大な資料の中から該当資料を手書きして持ち帰り、その論考は 4 年後に出版された。それは、まだ新幹線も開通しておらず、コピー機がなかった時代の、気の遠くなるような研究成果である。そのため、先行研究に若干の記述の誤りや誤植等が見られた。本論では、先人のご苦勞に敬意を表しつつ、それを加筆修正させて頂くことも学位論文の目的の一つとする。

その後、熊本バンドや熊本洋學校の研究は、昭和 60 年あたりまでにかけて精力的に行われ、多くの研究書籍が出版された。それから四半世紀を経た現在、広範な資料をもう一度洗い直し、それに新たな資料を加えて、資料に基づきジェインズの足跡を新しい視点で分析再考したうえで、事実関係を詳らかにする意義は大きいと考える。

ジェインズは、「傭外国人」<sup>7</sup> 教師として日本に 12 年滞在した。その間、彼は、‘Nothing but enlightenment—education.’ 「なすべきことは啓発、即ち、教育のみなり」<sup>8</sup> という高い志の火を消すことはなかった。ジェインズは、初任地、熊本洋學校で、開明進取の気概を備えた聡明な生徒達と出会った。彼らの多くは、洋學生の頃から、或いは、社会に出ると、ジェインズと同じ教職の経験を経て、宗教界、実業界等で功績を残している。

ジェインズが日本で長期に渡って教育活動を継続することができたのは、とりわけ、洋學校生徒との交流が続いたためであろう。この想定に基づき、彼の全体像を構築すること

---

とする。

<sup>6</sup> 明治 12 年 6 月 12 日、同志社の第一回卒業式が行われ、卒業生 15 人は全員熊本から来た生徒（元熊本洋學校生）だった。（上野直蔵・編集『同志社百年史 資料編一』、学校法人同志社、1979 年、p.720。同志社記事（明治八年八月～明治二十一年五月））

<sup>7</sup> 第三高等学校関係資料に保管されているジェインズの給与個票に、「俸給諸給 傭外国人計給」と刻まれた 1.7 x 1.0 cm の朱印があった。「傭外国人」は、これらの印字を借用したものである。

<sup>8</sup> Janes, L. L., *KUMAMOTO, An Episode in Japan's Break from Feudalism.* (Kyoto: 京都 同志社 社史々料編集所, 1970), II, p.14. 本稿で取り扱った英文文書和訳は筆者の翻訳によるものである。

が、本論の最終的な趣旨である。彼の足跡をでき得る限り追い論じる学位論文の要約を以下に記述する。

### 「アメリカから日本へ」

本節では、「アメリカ合衆国国勢調査局 1850 年第 7 回国政調査」、並びに、*The History of Tuscarawas County, Ohio*.<sup>9</sup> (以下『オハイオ州タスカラワス郡史』とする。)を主たる資料として、ジェインズの生い立ちとアメリカにおける履歴、ジェインズの熊本時代の農業指導の指針になったと考えられるタスカラワス郡創設期の農業事情、さらに、彼が日本国熊本に招聘された経緯を再検認する。

ジェインズの父イライシャは、オハイオ州タスカラワス郡に入植後、長老派教会長老、郡保安官、農業協同組合長の名誉職に就いた。先行研究では、ジェインズの育った開拓時代の農業の実情に触れる論文がない。しかし、彼が熊本赴任時代に地域の人々に農業を指導する際、タスカラワスで行われていた農事農法が指標となっていたと推察できるため、本節ではタスカラワス地域の農業事情<sup>10</sup>を明らかにし、後述の彼の熊本時代における地域貢献に繋げたい。

ジェインズは、教会の長老で日曜学校の指導者である父と、徳の高い母を持つ熱心な基督教信徒の家庭で育った。彼の脳裏に焼き付いた少年時代の記憶は、順調な生活を送っていたジェインズ家を襲った二つの悲劇—妹の死と、父イライシャの教会除名であった。奴隷制という旧体制に立ち向かった父親の姿は、後年、開国や近代化の宣言はなされていたにも拘わらず、封建制という旧体制が敷かれたままの日本国で孤軍奮闘するジェインズの羅針盤となり、教会組織の絶対的な規律の中にあっても自然な感情を重んじた母の姿は、どのような状況でも自分の道を貫いたジェインズの心の支えとなったはずである。

ジェインズは、1856 年 7 月 1 日にウエスト・ポイント米国陸軍士官学校に入学した。南北戦争が勃発すると、「北軍士官」<sup>11</sup>として従軍し、1863 年 8 月から 2 年間は母校で歩兵戦術及び砲兵戦術の指導教官助手を務め、<sup>12</sup> 倫理学、英語学、及び英文学を講じた。<sup>13</sup> 彼は砲兵大尉に昇進したが、<sup>14</sup> その後退役する。1868 年 1 月 2 日、ハリエット (Harriet Scudder) と結婚すると、メリーランド州「セントデニス」に移って、エルクリッジ・ファームを購入し、そこで 3 年間暮らした。一方、アメリカでフロンティア・ラインが西進し領土が拡大していた頃、日本は、鎖国政策を放棄する一方、西洋化政策を採用して西洋の科学、文化、制度等を摂取しようとしていた。ジェインズは、岳父スカッター博士 (Henry Martyn Scudder, 1822 - 95) の人脈により、日本政府が高額な給与を負担する傭外国人として、西方にある日本国を目指したのである。

<sup>9</sup> J. B. Mansfield, *The History of Tuscarawas County, Ohio*. (Chicago: Warner, Beers & Co, 1884).

<sup>10</sup> Mansfield, *op.cit.*, pp.400-04.

<sup>11</sup> Notehelfer, F. G. *American Samurai: Captain L. L. Janes and Japan*. (Princeton: Princeton UP, 1985) p.54.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p.71, p.74.

<sup>13</sup> 第三高等學校「外國教師備入御届」(第一一六號)明治 30 年 8 月 2 日、第三高等学校関係資料。

<sup>14</sup> Notehelfer, *op.cit.*, p.75.



## 熊本洋學校赴任

本節では、『肥後藩國事史料』、『県政文書』、『クマモト』、並びに、『横井小楠 儒学的正義とは何か』(松浦玲、2000年)を主たる資料として、幕末維新の熊本の社会事情と、「外国人教師が英語で授業を行う」ための学校が開設されるまでの道程を踏まえたうえで、洋學校教師として或いは農業アドバイザーとして熊本の近代化に貢献した経緯を詳らかにする。さらに、洋學校閉校の原因となった生徒有志の基督教への傾倒、加えて、洋學校閉校後に実学党連や洋學校元生徒が熊本に次々と設立した英語学校についても再検認する。

熊本洋學校の開校は、明治3年の「肥後の維新」における教育改革の一環である。しかし、同校は、実学党の巨擘、横井小楠(1809 - 1869)が幕末に米国留学させた甥の一人、横井大平の進言や、小楠の門人である野々口爲志ら肥後実学党連の尽力で、成就したことを失念してはならない。

当初、熊本藩が熊本洋學校で生徒に兵学を教授しようとしたことは、これまでは、ジェインズ、徳富蘇峰、野々口爲志の証言のみに基づくものであった。しかし、彼が陸軍教師として招聘されたことを示す外国人雇入契約書(外務省外交史料館所蔵)を発掘し、公文書の裏付けを確保した。

熊本では、洋學校新入生の選考も既に終了し、ジェインズの到着を待つばかりであった。1871(明治4)年7月、ジェインズは、来日後東京で肥後の役人と契約を交わすと、船を乗り継ぎ、熊本に急行した。彼は、東京から熊本に移動するまでの間に、米国オランダ改革派教会外国伝道局総主事、フェリス(John M. Ferris、1825 - 1911)に書簡を数通送付している。太陽暦を用いるジェインズの書簡の日付を太陰暦に直すことによって、書簡に記されていた東京から熊本までの彼の動向を、日本の資料に残る着熊以降の動向と繋ぐことができた。

明治4年8月、「當年齢三十四五にして活氣炎々筋骨逞しく一見して軍人たる」<sup>15</sup> L. L. ジェインズ大尉が、米国陸軍士官学校で培った教養知識と、生まれ育った開拓地の農業技術を携え、熊本・百貫港に到着した。ジェインズ一家が官舎のある熊本城まで辿った Serikawa 沿いのルートは、先行研究<sup>16</sup>の白川沿いではなく、当時「井芹川」と認識されていた現・坪井川に沿ったルートであったらと結論を出すことができた。

彼を招聘した熊本藩(熊本縣)は、元号が明治に変わって3年という短期間で革命を成就させたが、地域には旧体制の思考や習慣が深く根づいており、各所でひずみが生じていた。このような混乱の中で、当時、新たな推進力となったのが教育の普及で、これを牽引したのが、主として、ジェインズのような御雇外国人教師<sup>17</sup>と呼ばれる人達であった。ジ

<sup>15</sup> Tadajiro Fuwa, 'My Reminiscences of Capt. Janes.' 不破唯次郎(洋學校二級生/三級生)

<sup>16</sup> 田中啓介、上田穰一、牛島盛光編訳『ジェインズ熊本回想』改訂版、熊本日日新聞社、1978年、16頁。／花立三郎「ジェインズと熊本洋学校の生徒たち」『熊本黎明期の人びと』熊本大学、1984年。41頁。

<sup>17</sup> 1871(明治4)年、熊本には二人の御雇外国人教師が招聘された。ファン・マンズフェルト(Constant George van Mansvelt、1832 - 1912)は醫學所に、ジェインズは洋學校に赴任している。(ユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』小学館、1975年。)

エインズは、熊本洋学校において、ただ一人で、青少年に人格教育と英語による普通教育を施した。在職期間は5年（1871 - 76）であったが、彼は、生徒に最も質の高い啓発と福祉を保障したばかりか、地域社会にも多大な影響を与えた。<sup>18</sup>

**熊本洋学校の教育** 「堯舜孔子の道を明らかに」するために、漢籍に精通した上で「西洋器械の術を盡く」すという小楠の立ち位置は、旧「洋學所規則書」で、洋学校の入試に、英書の試験の他漢籍科目を採用したことに現れ、新しい塾則でも、洋學所漢籍教導を配置して漢籍講釋の授業を設けたことに反映されている。

その一方で、通訳の解雇や、ジェインズの雇用期間が3年であったにも拘らず洋学校の修業年が4年に設定されたことは、ジェインズの強い意向によって実施されたものである。加えて、ラッパを合図に日課を知らせる等の規律正しい寮生活の他、「自助の原則」、優等生の助教担当、小班に分かれ生徒に競争させて英語の基本を習得させる授業等の洋学校の職務や教育法に、さらに、席次の公開、試験を受け修了書を授与された者のみ進級するシステム等の授業評価処理にまで、随所に、ジェインズの母校、ウエスト・ポイント米国陸軍士官学校の規則<sup>19</sup>が導入されていた。

彼は洋学校に赴任すると、専門外の語学指導をウェブスターのスペリング・ブック<sup>20</sup>と母校ウエスト・ポイントの軍隊式教授法で乗り越えた。ジェインズは、日に日に知識を身につけていく生徒に触発されて、日夜研究に励み、その後もやはり一人で広範な専門科目の授業を進めた。洋学校では、その学業の厳しさゆえに、ジェインズの授業は殆ど毎日が試験と言っても過言ではなかったという生徒の証言がある。<sup>21</sup>それを象徴するように、「洋学校進退人員数」（『白川新聞』）の数値は、「音聲不良」や「學事不精勤」等の理由で多くの退学者が出たこと、並びに、3年を過ぎて一級生の3割しか学業を続けることができなかったことを報じている。この退学率の高さは、「洋学校を設立する以上は、外国人を教師としなければ完全な教育は望めない」と進言した横井大平の意思に基づき、明治の初年に地元熊本でレベルの高い英学の授業が展開されたことを裏付けるものである。加えて、女学校を除き女子の入学を試みるような学校がなかった時期に、女子学生がジェインズから洋学校に入学することを許され、男子生徒と共に彼の教育を受けたことも注目すべき点である。

熊本洋学校では、実学党の進取実用主義と、ウエスト・ポイントの実践主義がうまく融合して、

<sup>18</sup> 1989（平成元年）年、熊本県教育委員会は、「西洋文明、食品等も熊本に初めてもたらした熊本洋学校教師」L. L. ジェーンズを熊本県近代文化功労者（故人）として顕彰している。平成元年以前には、横井小楠（第一回、故人）、徳富蘆花（第三回、故人）、徳富蘇峰（第五回）、横井大平（第六回、故人）、福田令寿（第八回）、小崎弘道（第二十一回、故人）、横井時敬（第二十七回、故人）が受賞している。（熊本県教育委員会『熊本県の近代文化に貢献した人々—功績と人と（平成元年度近代文化功労者）—』、熊本県教育委員会、1989年、目次。）

<sup>19</sup> United States Military Academy, *Regulations of the U.S. Military Academy, at West Point*. (New York: J. & J. Harper, 1832).

<sup>20</sup> Noah Webster, *The Elementary Spelling Book*, (New York: D. Appleton & Co, 1866).

<sup>21</sup> 福永文之助『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』警醒社書房、1894年、9頁。

外国人教師が効率的に教授できる環境が整えられていったことが窺える。熊本洋學校で実践された外国人教師の母語による英学の授業は、洋學校教師ジェインズの熱意あふれる合理的な教授、生徒の未知の領域に足を踏み入れようとするチャレンジ精神、実学党連の堅実な支援—これら全てが揃わなければ、決して成立することはなかったであろう。

**細川護久の学資金** 1872 (明治5) 年8月3日 (9月5日)、学制が頒布された。学制は、学校の民費維持を原則としたため、政府は外国人教師の俸給を凍結すると公言した。そのため、洋學校第3教育年度の終了とともに、ジェインズは失職の危機を迎えたが、細川護久が私財を投じて洋學校事業の存続を約束した。

先行研究によると、護久が投じたお金は6000円ということになっている。しかし、明治7年洋學校創立4年目に、護久が洋學校に5500円を寄付したことを記す公文書、並びに、この学資金が政府の撤回した洋學校職員人件費に充てられたことを示す公文書を発掘した。さらに、創立5年目に関しては、護久が明治8年10月から同9年9月に掛かる「當縣下學資金」6000円を寄付した記録 (明治8年9月7日付) も見出している。しかし、これらの資料だけでは、明治7年度に学資付加金500円が存在して、やはり総計6000円が献金されていたのか、並びに、先行研究者が意図するように、明治8年度の護久の学資金6000円は洋學校のためだけに充当されたのかを判断することはできない。引き続き、資料を追いたい。

**ジェインズの地域貢献** 創立4年目の1874 (明治7) 年10月3日<sup>22</sup> に洋學校二度目の開校式が執り行われた。この折、ジェインズは、長時間に渡って演説を行い、教育を受けることの意味と近代化の道を歩む意義を聴衆に講じた。<sup>23</sup> 彼は啓発と人道という大義を訴え、洋學校において生徒を教導するだけでなく、校務外で地域の人達にも西洋の文化を伝えている。日本人の食生活を改善するために食肉を強く勧めたのは、ジェインズだけでなく、古城醫學校のマンズフェルトも同じだった。<sup>24</sup> 当時の御雇外国人教師は、単に自分の専門技術を伝授するだけでなく、任地の文化を引き上げる努力を厭わなかったようである。

ジェインズは、教師館に入居していた5年の間、好奇心からここに訪れる多くの人のために、常時門を開放した。<sup>25</sup> 月に一度、米国から長崎を経由して届いた新聞や雑誌を訪問者に公開し、彼らに未知の世界の情報を提供した。ジェインズは、竹崎茶堂らの勧めで様々な農業事業に関わり、地域に貢献した。明治初年の農書の大部分が欧米農書の翻訳だった中で、縣当局の「どのようにして熊本県内の農業生産を拡大すべきか」という問題に対し彼が説

<sup>22</sup> 白川縣洋學校一級生徒 山崎爲徳 伊勢時雄 岡田源太郎 集譯 「あとがき」『洋學校教師祝文訳』 (明治七年甲戌十二月)

<sup>23</sup> ジェインズの祝辞演説は、文章に直し翻訳され、フランクリン印刷機で印刷されて、国中に配布された。ジェインズの英文原本を文章に直し漢訳したのは、後進生授業方でもあった三人の一級生生徒、山崎爲徳、伊勢時雄、岡田源太郎である。

<sup>24</sup> 熊本県立第一高等学校『隈本古城史』熊本県第一高等学校、531頁。

<sup>25</sup> Janes, *op.cit.*, IV, p.92.



いた独自の見解は、彼の著書『生産初歩』に纏められている。<sup>26</sup> さらに、生徒の保護者、即ち、実学党連に殖産興業を提言した。

途中で失敗した例もあったが、同時期、ジェインズや実学党と関係がない者で肥後産業に貢献した人は極めて少ないと言われている。<sup>27</sup>

**洋学校における基督教教育** 1875(明治8)年8月7日に洋学校一級生(明治四年撰入生)が卒業した。<sup>28</sup> 京都で官許同志社英学校が開校したのは、同年11月29日のことである。

彼は「英語普通学教師」<sup>29</sup> として雇用され、洋学校で基督教教育を行うことはできなかった。しかし、「およそ4年間、熊本で生徒に宗教を説いてきました。」(デイヴィス宛、1876年2月7日付)と書簡に書き残している。これは、授業で直接聖書や基督教を教えたのではない。例えば、天文学の授業では、天地の神秘により有神の信仰は自然なことであること、さらに、歴史の時間では、欧米文明の基礎は基督教の信念に基づくため聖書を理解する必要があることをジェインズから学んだと生徒が証言している<sup>30</sup> ように、彼は、授業を通して、間接的に基督教の知識を生徒に教授したことを意味するものと認識する。

その後、ジェインズは自宅でバイブルクラスを開き、一部の生徒に聖書を教え始めた。生徒に聖書の直接指導を始めた時期に関して、当事者である洋学校生徒の回顧録と「坂上竹松の洋学校修学証明書」等の資料に基づく筆者の論は、海老名弾正(洋学校二級生)の教え子、渡瀬常吉の著作に基づくと考えられる先行研究と、若干異なる。

明治9年1月30日、即ち、同月最終の安息日に、花岡山結盟事件が起こった。<sup>31</sup> これは、花岡山山上において、洋学校生徒が作成した「奉教趣意書」に従い、同校生徒有志が基督教の信仰を宣言して献身の決意を誓った事件である。この事件後、洋学校は閉校されることになり、ジェインズの失職が決定した。彼は、クリスチャンに改宗したため熊本を追われた教え子達を同志社に託す手筈を整えた。<sup>32</sup>

ジェインズの再就職先に関して、洋学校で基督教教育に関与したことが原因したのか、開成学校への雇用は破談となっている。一方、同志社英学校、デイヴィスの書簡には、彼が同志社に進学した元熊本洋学校生と接する中で、熊本洋学校の教育の質の高さとジェインズの生徒に対する影響力を証言する叙述が数多く見られた。さらに、ジェインズの教育理念に基づいて牧師を目指し肅々と勉学と宣教活動に励む元洋学校生の生活も描かれている。

<sup>26</sup> 「米國 カピテンゼンス氏 著 白川縣洋學生徒 山崎為徳 松村元兒 市原武正 集譯」(明治六年 癸酉季夏 洋学校蔵版)『生産初歩』も洋学校生徒によって漢訳されている。

<sup>27</sup> 花立三郎、前掲書、19頁。

<sup>28</sup> 一級生、余田司馬人の卒業証書の日付は7月26日となっている。(『肥後藩國事史料』明治4年に撰入された45名の生徒のうち、卒業したのは11名(潮谷総一郎「熊本洋学校とジェインズ 熊本バンドの人びと」熊本年鑑社、1991年、118-19頁。)だと言われている。

<sup>29</sup> 村口一雄『我観 熊本教育の変遷』第一書房、1983年、56頁。

<sup>30</sup> 小崎弘道『七十年の回顧』大空社、1992年、17頁。

<sup>31</sup> 福永文之助、前掲書、35頁。

<sup>32</sup> A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Feb. 23, 1876.

(デイヴィスからクラーク宛、1876年12月30日付及び1877年2月20日付) ジェインズと同志社との距離が縮まらず、彼が同志社に奉職できなかったのは、ジェインズ自身が平信徒であることに固執したためだったと推察する。<sup>33</sup>

予備論文に添付する論文は、主に本項に関して論じたものである。

### 大坂英語學校赴任

ジェインズは、明治9年11月1日から同11年7月31日までの雇約<sup>34</sup>で、主任として<sup>35</sup>大坂英語學校に雇用されることになった。これは、「物理化學ノ大意ヲ傳習スルニ足ルノ人材」<sup>36</sup>を求めた同校及び文部省が、ジェインズの熊本洋學校における科学教育の業績、つまり、基督教とは関係のない彼の功績を認めたためであろう。しかし、汚染された井戸水で家族が重篤な腸チフスに罹ったうえ、同僚外国偉人教師との確執や、週28時間専門科目を教授するという過重な負担で、明治10年4月10日に同校を依願退職し、<sup>37</sup>同年5月、ジェインズは妻ハリエットと4人の子供とともに帰国の途についている。しかし、日本を離れた後も、彼は「海の向こうから、熊本洋學校の教え子達の活躍を信じて疑わず、自分の心は日本にいる生徒の心と共にある」(クラーク宛、1877年10月1日付)と吐露し、熊本で共に過ごした教え子に対する思慕は深い。書簡を通して見える初度来日時ジェインズの功績は、熊本で育て上げた生徒の学業成績の高さと、彼らの同志社での伝道活動における真摯な姿勢に集約されていると言えよう。

### 第三高等中學校と同志社

ジェインズは再婚した妻フロラ(Flora Janes、1860年10月18日生)と再来日を果たし、第三高等中學校に赴任した。その支援の発信元は、かつて彼が教え子を送り込んだ同志社であり、新たな母校、同志社の幹部となった洋學校元生徒だった。<sup>38</sup>当初、第三高等中學校の雇入れは、明治26年7月25日から同27年8月3日まで<sup>39</sup>の1年契約であったが、2度

<sup>33</sup> ジェインズが、当時計画中の同志社カレッジの校長に乞われながら、諸々の事情で同志社に奉職することはなかった理由については、石井容子「初来日時におけるジェーンズ大尉と熊本洋學校生—ABCFM 宣教師文書とキャプテン・ジェーンズの書簡を通して—」『熊本大学社会文化研究』9、2011、74-75頁を参照。書簡の記述に基づき考察している。

<sup>34</sup> 大坂英語學校「明治九年檢印簿」京都大学大学文書館所蔵。

<sup>35</sup> A letter from J. D. Davis, Kyoto, to N. G. Clark, Boston, dated on Dec. 30, 1876.

大坂英語學校「明治九年檢印簿」京都大学大学文書館所蔵。

<sup>36</sup> 大坂英語學校「第八學年 從明治九年九月 至同十年八月 年報」明治十一年三月刊行、及び、「明治九年從一月至八月年報」明治十年十二月刊行 京都大学大学文書館所蔵。

<sup>37</sup> 大坂英語學校「明治十年四月補助金定額常費内譯表」京都大学大学文書館所蔵。

<sup>38</sup> 「外国教師備入御届」によると、ジェインズの第三高等中學校雇入れの紹介者は小崎弘道(当時、同志社第二代社長)である。明治25年度は同志社にとって節目の年であった。明治25年12月28日、同志社創設に貢献した山本覺馬が逝去した。明治26年1月10日、18年間同志社教授を務めたJ. D.デイヴィス師が退職し、同月23日、同志社は故新島総長の三周年紀念會を終えた。つまり、同志社は創設時の幹部から熊本バンドに世代交代した。

<sup>39</sup> 第三高等中學校「外国教師備入之儀」(第七九二號)明治26年5月8日、第三高等学校關係資料。

「傭継」され、結局、ジェインズは明治28年7月31日まで2年間奉職している。<sup>40</sup> 明治26年度は週16時限、<sup>41</sup> 明治27年度は14時限、<sup>42</sup> 英語の授業を担当した。さらに、明治26年には同志社公会堂で演説を行っている。<sup>43</sup> 途中、高等学校令に基づき、明治27年9月に第三高等中學校が第三高等學校と改称された<sup>44</sup> ので、明治28年7月末日に「傭満期」となったジェインズは、第三高等學校を退職したことになる。

同志社「廿五年度報告」及びその前後の記録を見ると、ジェインズが再来日した明治26年の夏頃、壮年期を迎えた多くの元洋學校生は、恩師の赴任地、京都に集結できるポストに就いていた。彼らは同志社の運営に貢献し、また、ジェインズの第三高等中學校赴任に尽力したこと等が資料から推察できる。それ以降も、教え子達がジェインズを精神的に経済的に支援していたことを示す新たな資料も入手した。

以上を鑑みると、彼が熊本で育てた生徒達の行動力や社会的地位は、彼らがジェインズを再来日させた時点で、56才の師を越えていたのかもしれない。

### 鹿児島造士官と第三高等學校

ジェインズが第三高等學校を退職した1895（明治28）年7月末前後の学務文書に、彼の次の仕事を記す書類は見当たらない。それから2年後、第三高等學校に再度赴任したジェインズの履歴書の旧職業に「鹿児島尋常中學造士館」と記載されているのみである。<sup>45</sup>

第三高等學校を退いて2か月余り経た10月3日、ジェインズは、京都市上京区役所から官舎の立ち退きを通告された。<sup>46</sup> その後、彼が浮田和民（二級生）に宛てた書簡<sup>47</sup> によると、ジェインズ夫婦に息子が生れ、翌1896（明治29）年7月20日、親子三人で鹿児島に向け乗船している。資料を整理すると、官舎の立ち退きを通告された1895（明治28）年10月から、鹿児島に向け乗船した翌年7月20日まで、9か月間のジェインズの所在に関する資料が見当たらないことが分かった。この9か月のジェインズの動向は、今後解明すべ

<sup>40</sup> 第三高等中學校「午秘甲三三〇號」（文部大臣井上毅）明治27年8月3日で、明治27年8月4日から明治28年3月31日まで雇用が延長となり、さらに、「未秘甲七九號」（文部大臣侯爵西園寺公望）明治28年3月20日で、明治28年4月1日から同7月31日まで延長された。

<sup>41</sup> 第三高等中學校「職員調」、明治26年9月末日、第三高等学校関係資料。

<sup>42</sup> 第三高等中學校「明治二十八年文部大臣官房往復書類」第三高等学校関係資料。

<sup>43</sup> ジェインズは、明治26年に同志社公會堂（現・チャペル）で講演を行った。そのチャペルには、現在、創始者である新島襄（初代社長）、山本覺馬（新島没後、臨時総長）、J.D.デイヴィスの他、8代目までの校長の肖像画が四方壁面に飾られている。第2代社長から第8代総長のうち、5名が所謂熊本バンドと呼ばれた人達だった。—1892（明治25）年3月小崎弘道第二代社長に就任。1897（明治30）年8月横井時雄第三代社長に就任。1907（明治37）年3月下村孝太郎第六代社長に就任。1907（明治40）年1月原田助第七代社長に就任。1920（大正9）年4月海老名弾正第八代総長に就任。（同志社略年表（1875年～2001年）、同志社大学人文科学研究所、2001年）従って、かつて師が講演したチャペルに教え子5名の肖像画が飾られていることになる。

<sup>44</sup> 神陵史資料研究会『史料 神陵史—舎密局から三高まで—』神陵史資料研究会、1994年、533頁。

<sup>45</sup> 第三高等學校「履歴書 第三高等學校雇教師 レレイ、レーイング、ゼーンズ」（第三高等学校関係資料）

<sup>46</sup> 第三高等學校「第九一六號」明治28年10月3日。（第三高等学校関係資料）

<sup>47</sup> A letter from L. L. Janes, Kagoshima, to Kazutami Ukita, Kyoto, dated on Aug. 12, 1896.

き課題である。フロラの妊娠中にジェインズは第三高等學校を満期解雇となり、住む場所もなく、仕事も定まらず、途方に暮れていたことが推察できる。

鹿児島に到着して半年経た 1897（明治 30）年 2 月にジェインズが浮田和民（二級生）に宛てた書簡<sup>48</sup>には、不安定な政局を中央で支えていた旧薩摩藩士にすがって鹿児島が高等中学校の立て直しを図ろうとしていたこと、鹿児島に移ったものの仕事がなく、ジェインズは金銭的困難や精神的なストレスを抱えて生活していたこと、やっと 1 月末から造士館の生徒に週 16 時間英語を教え始めたこと、諸外国と交易する鹿児島の人々にも啓発は必要であること、ジェインズが著作の出版を考えていること等、多岐に渡る情報が詳記されていた。

その後、事態は急展開する。第三高等學校に大學豫科が設置されるのに伴い、1897（明治 30）年 8 月 1 日から 1899（同 32）年 7 月 31 日まで月給 200 円でエル、エル、ゼーンズを雇いたいという伺書<sup>49</sup>が明治 30 年 4 月 23 日に同校から提出され、5 月 3 日に同書が認可された<sup>50</sup>のである。今回は当初からの 2 年契約であった。

ジェインズが造士館に赴任した経緯については、彼が「今まで折田氏の提案と要請に従い、鹿児島で辛抱してきた」と述べている（浮田宛、1897（明治 30）年 2 月 16 日付書簡）ことや、明治 30 年の彼の第三高等學校雇入れの手続きに際し「紹介人無之」と記録されていることに着眼すれば、第三高等中學校から引き続き第三高等學校の校長を務めた折田彦市が、彼の母校<sup>51</sup> 鹿児島造士館の職をジェインズに世話し、その後京都に呼び戻した可能性が考えられる。ジェインズは、明治 30 年度、月俸日本通貨 200 円（年俸 2400 円）で週 17 時限<sup>52</sup>の講義を担当した。明治 31 年 7 月 1 日以降は「職務勉勵」<sup>53</sup>につき給与が 50 円増額され、250 円に昇給した。<sup>54</sup>

明治 32 年 6 月 18 日、「満期解傭」で帰国するジェインズの送別会が第三高等學校講堂で開かれた。<sup>55</sup> この時、ジェインズは「年齒漸く老ひ」た 62 才になっていた。彼は、1893（明治 26）年に再来日し、6 年間日本に滞在した後、妻と 3 才の息子、1 才の娘を連れて帰米した。

<sup>48</sup> A letter from L. L. Janes, Kagoshima, to Kazutami Ukita, Doshisha, Kyoto, dated on Feb. 16, 1897.

<sup>49</sup> 第三高等學校「外国人傭入之儀伺」（第四九四號）明治 30 年 4 月 23 日。（第三高等學校關係資料）

<sup>50</sup> 第三高等學校「西秘甲二〇三號」（文部大臣侯爵蜂須賀茂韶）明治 30 年 5 月 21 日。（第三高等學校關係資料）

<sup>51</sup> 折田彦市は薩摩藩に生まれ、藩校造士館の出身である。（巖平『三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市—』思文閣出版、2008 年、18 頁。）

<sup>52</sup> 第三高等學校「明治三十一年文部大臣官房往復書類」（第三高等學校關係資料）

<sup>53</sup> 第三高等學校「傭外國教師増俸之儀伺」（秘第六五號）明治 31 年 6 月 21 日。（第三高等學校關係資料）

<sup>54</sup> 「明治三十一年七月一日以降一ヶ月貳百五拾圓ニ改ム」：第三高等學校、「條約書第二條ノ末ニ追記」（第三高等學校關係資料）

<sup>55</sup> 第三高等學校、「條約書第二條ノ末ニ追記」、第三高等學校關係資料。第三高等學校嶽水會「嶽水會日誌」『嶽水會雜誌』第三號、明治 32 年 12 月 10 日、78-79 頁。送別会の日付は 6 月 18 日で、先行研究の日付は 5 月 18 日と誤植になっている。



ジェインズの場合、当初、熊本藩が創設する兵学校の教師として雇用される予定だったが、廃藩置県が実施され、職務は英学教師に切り替わった。さらに、学制が発布されると、洋学校は創立3年目で閉校の危機を迎え、後年、鹿児島に転出した折は、政局が安定しなかったため無給の期間が長く続く等、ジェインズは様々な苦境に直面している。また、各公文書等に記載されているリロイ・ランシング・ジェインズの姓名は、「レイ、レーイング、ゼエンス」等、幾通りものカタカナ名が見られた。個人名の英文字発音表記がこのように統一されていなかったことを見ても、任地国での外国人の生活に伴う試練の大きさや不安定さが窺える。

### 祖国アメリカでの晩年

フロラの談<sup>56</sup>によれば、明治32年日本を去る時、ジェインズは、学生<sup>57</sup>から贈られた記念写真帳を手にして懐かしい日本を去ってから、間もなく健康を害してガーデン市の療養院に静養した。絶えず日本における基督教伝道を気にかけて、特に、鹿児島における二年の印象、熊本における聖書講義、京都での生活などを回顧し話したという。しかし、老年のため再び健康が回復することはなく、1909年3月27日、73歳の誕生日に昇天したということである。

ジェインズの死は、フロラが海老名弾正に短い書簡<sup>58</sup>で伝えた。彼女は、直ぐに知らせるべきだったが、新聞の死亡記事が日本に伝わって、きっと日本から手紙が届くと考え、もたもたしているうちに夫の死後4か月余りも経ってしまったと書き伝えている。彼女は、その書簡で、熊本バンドの親身な力添えに感謝しているとも述べていた。事実、1908年に海老名弾正が欧米訪問の帰途、二度に渡ってカリフォルニア州サンホセのジェインズを訪問して、小崎弘道、宮川経輝、徳富蘇峰、浮田和民らの見舞金を持参している。<sup>59</sup>かつて、徳富一敬や矢嶋源助の惣庄屋を中心とする門人達が苦境の小楠を支えたように、小楠の門人の子弟を中心とする元熊本洋学校生は、海を越え、生活に困窮した恩師ジェインズの晩年を援助していた。

以上、学位論文の要点の一部のみ記述する。

---

<sup>56</sup> 「ゼーンズ夫人と令嬢及び宮川経輝先生に贈られたる夫人の書」『基督教世界』第2484号、基督教世界社、昭和6年9月10日。（同志社大学社史資料センター所蔵）

フロラの印象には、日本基督教界の元老の一人、横井時雄に対する花岡山事件直後の迫害が深く刻み込まれていた。また、彼女は、元老小崎弘道の重患を知ると非常に気の毒がり、続いて宮川経輝、海老名弾正両元老の引退、及び、徳富蘇峰や浮田和民の話題に転じると、是非逢いたいと話したと報じられている。

<sup>57</sup> フロラは、元洋学校生を、学生或いはジェインズも使っていた「ボーイ」と呼んだ。

<sup>58</sup> A letter from Flora Janes, San Jose, Cal., to Danjo Ebina dated on Aug. 7, 1909.

<sup>59</sup> 田中啓介他「解説」『ジェーンズ熊本回想』熊本日日新聞、1978年、165頁。